

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会

長崎に於ける坂本龍馬と池道之助 (池道之助日記から)

鈴木 典子



記録からよみがえる幕末の風景

後藤象二郎を頭に三十三人

のチームが組まれ、土佐藩の軍艦買い付けのため、長崎に出発します。当時アメリカより無事帰国して、外国の諸事情にくわしいジョン万次郎を通訳としての出発です。

一行が九州に渡り、臼杵から熊本城下を通り、阿蘇の裾野を通じています。そのスケッチを道之助が残しています。坂本龍馬記念館での展示の中に龍馬の手紙があり、その中に阿蘇山の絵が描かれてあります。タッチは違いますが、まさしく同じ阿蘇山のスケッチです。龍馬がお龍さんとの新婚旅行の旅先で描かれたものです。当時は街道は多くはなく、眺める視点もほぼ同じであると考えます。龍馬は山の絵の間にビッシリ文字を書き込んでいます。紙面の小さい巻紙を無駄なく使つたのでしょうか。

長崎での出来事の中、坂本龍馬率いる海援隊、という表現が出ています。道之助はよく、が好きだったようです。よく上若宮稲荷神社に参詣に出掛け

慶応一年から綴られている長崎での記録を残した池道之助は、私の五代前の祖父です。二年前、その記録を現代訳にして出版してから、大きな反響を得ました。

この紙面をいただいて、坂本龍馬とどのような拘わりを持っていたかを、私なりの考え方を交えて語りたいと思います。



道之助が記した 「いろは丸事件」

慶応三年の最も注目されてい

ています。(ここには小さな龍馬像が建っています)その若宮から、海援隊の龜山社中までは、わずか十メートルです。数年前、長崎に出掛け、石畳や石段の多い道を歩いてみました。道之助は若宮に出掛けた折、龜山社中にも足を延ばし、隊長の龍馬や隊員たちと、日本の将来について語り合っていました。道之助は腰痛を患っていますが、あの石段の多い道を歩き廻っていたからには、腰痛をわざわざらうのは納得のことです。当時の若者

は、いろは丸借り受け大坂へ行舟いろは丸借り受け大坂へ行船より帰る十日になる浪人

事件についても記されています。

四月二十九日今夜市太郎大

得のいくことです。当時の若者

は、いろは丸借り受け大坂へ行船より帰る十日になる浪人

事件についても記されています。

四月二十九日今夜市太郎大

得のいくことです。当時の若者

は、いろは丸借り受け大坂へ行船より帰る十日になる浪人

事件についても記されています。

四月二十九日今夜市太郎大

得のいくことです。当時の若者

は、いろは丸借り受け大坂へ行船より帰る十日になる浪人

事件についても記されています。

四月二十九日今夜市太郎大

得のいくことです。当時の若者

は、いろは丸借り受け大坂へ行船より帰る十日になる浪人

事件についても記されています。

四月二十九日今夜市太郎大

得のいくことです。当時の若者

十二日天気 横山 私 常
作 才谷梅太郎 尾小谷孝
蔵四五人連れにて聖福寺へ行
き紀州藩と談判いたす

同年七月には、丸山にて異人
二人が切られたイカルス号事件
が起こります。その犯人の疑い
が海援隊に掛けられ、龍馬の商

売は動きが止められます。その
ため土佐藩の主だったものたち
は、疑いを晴らすため夜を徹し
て調べや談判の様子が書かれています。

四月二十九日今夜市太郎大
得のいくことです。当時の若者

は、疑いを晴らすため夜を徹し
て調べや談判の様子が書かれています。

者ではないか、との疑いが掛けられたかな、とも思うのです。
その年の十一月四日いろは丸事件の賠償金と思われる記録があります。

今日紀州屋敷桜町へ金子受け取りに行く：

今は面白くてしかたがない

末つ子ふたり

京都国立博物館 宮川 植一

幕末の坂本龍馬と平安時代の藤原道長と共に通する点が多いといふと奇妙に思われるかもしれない。日本史的に見ると家柄というものが確立したのが道長の時代だ。道長が藤原撰閑家の祖であったのだ。長子相続を基本とした家格の固定化が進んだのが十二世紀とされている。一方、十九世紀に封建制度を打破し近代の扉を開いた人物の代表が坂本龍馬である。その意味では歴史の対極に置ける両者である。

共通点はふたりとも末つ子で、さるなる共通点はこのふたりをあつたことだ。道長は攝政藤原兼家の末子。龍馬も郷士坂本八平の末子であった。そして道長には円融天皇の皇后で二条天皇の母である東三条院詮子という強力な姉がいた。この詮子のはからいで道長は甥の伊周をおさえて藤原氏の長者にのぼりつめ、のちの繁栄を迎えることになつたのだ。一方の龍馬には、存知のとおり乙女姉さんがいた。彼女の叱咤激励が龍馬を成長させた。すなわち東三条院詮子と乙女姉さんはよく似ているのだ。

道長も龍馬も日本史に残る「お姉ちゃん子」だったのである。もうひとつの共通点は山登りだ。日本史上の人物で「登山」というキーワードから思い出されるのはこのふたりであろう。

藤原道長は寛弘四年（〇〇七）



奈良県山上ヶ岳の山頂
藤原道長が千年前に登った

コラム・龍馬のこと

ウチの龍馬さん

現代龍馬学会
中田 文

…考えた。実家で独り住む父（92歳）に、わが家に同居してもらう方法を。

そうだ！ “わが家の靈園に龍馬像の建立”を提案しよう。面白いことが大好きの父だ。

父は45年前、高知市に家を買い、私の結婚と同時期に墓場購入。父母の墓石は12年前（父80歳時）建て、墓誌板に写真の影彫りを入れた。その隣に“中田家のふるさと（納骨堂）”を造り義叔母と義弟が眠る。その敷地の前に龍馬さんを建てる計画を話した。

「そりや、えい。こじやんとえのを建ててみいや」父の目が光った。塚ノ原の靈園には、父の家からより朝倉のわが家からの方が近い。父は同居を即決断、その足で近所の墓石商・石心さんに向かった。

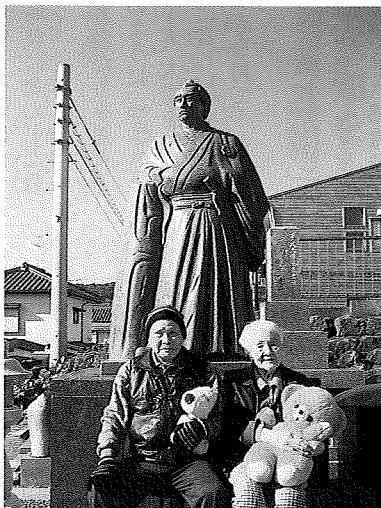
一平成24年6月5日朝8時。小雨の中1トン半の龍馬さんが宙を舞つた。クレーン車の操縦みごとに、住宅街の電線の上を通過して台座と合体。ビデオ撮影の主人が「こりや～中々の男前じや。お義父さん立派な龍馬さんが出来てよかったです」

2.7メートルを見上げる。

台座には父の石像建立の趣意を掘り込んだ。

「県立坂本龍馬記念館長・森健志郎氏の下に集い、龍馬の志、自由・平等・平和を世界に発信する為、平成24年3月20日「坂本龍馬財団」を設立した。この快挙を記念して、太平洋戦争の元海軍兵士であり龍馬ファンがこれを建立し、その趣意を後世に伝える。平成24年5月吉日 片岡茂清 建立」

—そして今年の両親の



年賀状は“ウチの龍馬さん”を背景に父母の笑顔の写真であった。両家の守り神は龍馬さんである。

“話してみるかよ”

高知市議・現代龍馬学会
寺内 憲資

1年間放送された大河ドラマ「龍馬伝」は全国に龍馬の一大ブームを巻き起こし、高知を元気にした。

全国各地の龍馬ファンは続々と龍馬の生まれた故郷を目指したのである。

南国土佐は「龍馬一色」となった。

龍馬ブームの火付け役は何と言ても司馬遼太郎先生の「竜馬がゆく」であった。

そして武田鉄也の「おおーい竜馬」へと続きさらに「龍馬伝」へと続いたのである。

今回の龍馬ブームの背景にあるものは龍馬の人間としての魅力は当然として、閉塞感漂う現今の世相と大きな関係があると思う。

今、国民は龍馬のようなリーダーを求めているのではないか。私利私欲を捨てた志の人物「坂本龍馬」。私には、電光石火の勢いで難局を乗り越えていった龍馬に人々が国政のリーダー像を求めていると思えてならない。

龍馬は脱藩した。我が人生に背水の陣を敷いたのである。

あまりにも有名な「日本を洗濯する」という龍馬の言葉には、龍馬の決意のもの凄さが表れている。

「日本の洗濯」。これこそが龍馬の誓願であったのだ。その為に自らが大きく動いて現状を打破していく。33歳の短い人生であったが、人の為、世の為に我が身を捧げ抜いた尊い人生であった。

私は「龍馬伝」を通じて誓願の人生を歩むことの大切さを学んだ。

愛唱歌「龍馬は今も生きている」の中に「己を捨てて道はつく」の歌詞がある。

私も己の信じた道を歩み抜きたい。

土佐の人間として電光石火、龍馬の如くに。